

# トーマス・ニッパードと 「歴史主義的」ナショナリズム研究(1)

今 野 元

## 0. 研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」

昨今のナショナリズム研究を概観するとき、我々はそのことに三つの問題を見ることができる。(一)ナショナリズム研究が反ナショナリズム「教壇預言」の性格を帯び、政治化した議論が史料の裏付の不十分なまま説かれているという問題。従来のナショナリズム研究は、しばしばナショナリズム克服のための啓蒙運動と一体不可分であった。ナショナリズム礼讃のための研究が学問的に問題視されるべきことは無論だが、ナショナリズム排除のための研究も、予め下された政治的価値判断を「学問」の名で権威付けている点で、同類だということが見過ごされている。とりわけ1980年代以降には、ネイションが「虚構」、「架空」、「欺瞞」であることを暴露するという「社会構築主義」理論が流行し、日本では「過去の克服」の主体としてですらネイションの存在を許容しないという急進的反ナショナリズムも珍しくない。東日本大震災後の日本で散見される「国民」的連帯の呼び掛けも、学界ではいかがわしい煽動として戒められることがある。また民族の悠遠なる歴史を説くナショナリストへの反撥から、ナショナリズム研究者は「ナショナリズムは近代の産物」を合言葉にナショナリズムの歴史の浅さを力説し、同時に「ポストナショナル」な地域統合、あるいは「グローバル」な秩序意識への期待を公言している。門外漢の近現代研究者が、前近代における「日本」意識や「ドイツ」意識、国民国家の「前近代的基礎」を、「理論」に基づき演繹的に否定するという傲岸不遜は、前近代研究者を苛立たせている<sup>1)</sup>。現代政治研究でも、左派の偶像ヴィリー・ブランドが「ベルリンの壁」崩壊に直面して述べた有名な言葉「共に [一つの民族に] 属するものが癒合する」(Was zusammengehört, das wächst zusammen)が、日本のドイツ研究界では(意図的に?)「共に属するものが今や共に育つ」などと不可解な誤訳をされ、民族の一体化に感激した長老ブランドの燃える愛国心が曖昧にされている<sup>2)</sup>。畢竟我々が学問と政治とを同一視するな

らば、白黒図式の歴史認識を助長し、歴史の逆説を見逃すことになりかねない。「それが一体どうなっていたのか」というランケ実証史学の原点を侮り、その時々々の時局に相応する「正しい歴史認識」を追求するとき、歴史研究における知的誠実さは危殆に瀕することになる<sup>3)</sup>。(二)ナショナリズムが批判される際、それが分析対象によって不公平に為されているという問題。これもまた政治化したナショナリズム研究の問題点の一つである。ヨーロッパに関して言えば、「ナチズム」を生んだドイツのナショナリズムはいつも戯画的に描かれ、近現代史研究者にとってドイツ・ナショナリズムは、学問的分析の対象ではなく政治的嫌悪の標的となっている。だがその周辺のチェッパ・ナショナリズム、ポーランド・ナショナリズム、あるいはユダヤ・ナショナリズムは、いわば「悲劇の民族」の愛国心として、明らかに共感を込めて描写されている。イギリスやフランスのナショナリズムは先進的形態として標準視されているが、世間の同情を集めにくいロシア・ナショナリズムは後進的形態、他民族抑圧の代名詞として批判されている。しかもそうした各国ナショナリズムの描き方はきわめて印象論的であって、一次史料や実証研究との関係が不明瞭か安直なことが多い。多数派の「ネイション」の「実体」視は果敢に攻撃する論者も、少数派の「エスニック・マイノリティ」は寧ろ「実体」視するという「二重の基準」に陥りがちである。個人の次元でも、例えばドイツのナショナリズム批判者であるフリッツ・フィッシャー、ユルゲン・ハーバーマス、ギュンター・グラス、ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーは、他者だけでなく自分やその関係者に対しても、同程度に批判的たりえたとは言えないだろう。要するに現代のナショナリズム研究は、特定の時代や地域の状況あるいは人物を肯定したり否定したりする党派的道具になっているのである。(三)ナショナリズム研究においても、政治学一般と同じく「英語帝国主義」<sup>4)</sup>が顕著であるという問題。そもそも日本では、戦前政治学＝ドイツ国家学＝法学的・官憲国家的教説から戦後政治学＝英米社会科学＝科学的・民主的思考へという進歩史観が定説とされ、ドイツ学への否定的先入観が熱心に醸成されてきた<sup>5)</sup>。英米圏を国際標準とし、戦後ドイツ学界の脱ドイツ化(英米化)に喝采するドイツ研究者の姿勢も、そうした先入観に拍車をかけている。ナショナリズム研究においても、ハンス・コーン、カール・ドイチュ、アーネスト・ゲルナー、ベネディクト・アンダーソン、ライア・グリーンフェルド、エリック・ホブズボーム、アンソニー・スミスといったアングロ＝

サクソン圏の、大胆な比較や推論を駆使した図式的ナショナリズム批判が通説として紹介されるのに対し、それ以外の語圏の研究はそもそも存在しないかのように扱われるか、マイネッケの「文化国民」、「国家国民」論のように卑俗化した形態で流布されるのみである。特に膨大な蓄積のあるドイツ語圏のナショナリズム研究を看過することは、固より学問上許容できないが、ナショナリズム研究者のドイツ語能力が減退するなかで、事態は悪化する一方である。

「ドイツにおけるナショナリズム研究」は、かかる研究動向に一石を投じるべく構想された研究企画である。本研究企画では、第一にドイツの主要なナショナリズム研究者を選出し、その学説の概要を紹介した上で、それにどのような学問的意義があるかを検討する。研究者の選出に当っては、個別の実証研究の経験を踏まえ、更に思考を深めて理論的見通しを示した人物に注目する。第二に、その人物がナショナリズム研究を生み出すに到った人生上、あるいは研究上の経緯について叙述する。これは結局のところ、かつて叢書『ドイツの歴史家たち』<sup>6)</sup>が行ったことを、ナショナリズム研究に焦点を絞り、その執筆者世代（つまり「ドイツ社会史派」世代）も分析対象に入れて再び実施する企画である。このような作業を経ることによって、この研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」は、先進的研究の「学習」という従来の「輸入学問」、「政治学学」とは一線を画し、学問を通して見たドイツ政治史の試みともなるのである。

## 1. トーマス・ニッパードの人格と業績

本論はこの研究企画の第4作として、ミュンヘン大学教授として知られたトーマス・ニッパード（1927-1992年）を取り上げる。ニッパードは戦後ドイツを代表する歴史家の一人であり、「ドイツ特有の道」論を提唱する「ドイツ社会史」派の最強の論争相手であって、ナショナリズムを繰り返し論じた歴史学者として知られている。ニッパードはまた、「歴史主義」<sup>7)</sup>の継承者として日本のドイツ近現代史研究界で一貫して軽視され、ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーが改革者として激賞される際に、その保守的対決者あるいは引き立て役として表面的に扱われる程度であり<sup>8)</sup>、ごく最近まで一冊の著書も翻訳されなかったという点でも注目される<sup>9)</sup>。本論ではまずニッパードという人物について概説し、次いで彼の

ナショナリズム研究を概観し、最後にその学問的意義を診断する。

トーマス・ニッパードアイは、1927年10月27日にケルンで生まれた。父は後述のハンス・カール・ニッパードアイ、母はヒルデガルト（旧姓アイサー）である。トーマスは1937年よりクロイツ小路のケルン市立高等学校（Oberschule）を訪れたが、戦時動員で学業は中断された。ケルンと言えばカトリックの大聖堂が有名で、ニッパードアイ自身それを論題にもしているが<sup>10)</sup>、ニッパードアイ本人はプロテスタントである<sup>11)</sup>。ちなみにニッパードアイは、ヨーゼフ・ラッツィンガー（教皇ベネディクトゥス16世）と同年齢であり、モムゼン兄弟より3年上、ヴェーラーより4年上、ヴィンクラーより11年上ということになる。

トーマス・ニッパードアイの父は、モムゼン兄弟の父ヴィルヘルムと同様ヒトラー政権に加担した過去を有する学者だが、モムゼンの父と違い最後まで学界の重鎮として君臨することができた。このためか、ニッパードアイにはモムゼンが表明するような国民社会主義に纏わるルサンチマンがない。トーマスの父とは、ケルン大学法学部教授で、戦後には連邦労働裁判所初代長官を務めた労働法の権威、ハンス・カール・N・ニッパードアイ（1895-1968年）である。ハンス・ニッパードアイは、国民社会主義政権下でも教授職を全うし、法学者として体制に奉仕した人物として知られている。ニッパードアイはカール・シュミットをケルン大学法学部へ招聘し、ハンス・ケルゼンと一つの学部で勤務させるという「実験」を希望したと言われ、またシュミットがベルリンへ転出する際には、法学部長として強く慰留したことが分かっている<sup>12)</sup>。ちなみに父のみならずトーマス自身も国民社会主義政権下で12年余りを過ごしていたわけだが、この時代の自分に対する考察も見当たらない。

トーマス・ニッパードアイは1946年に大学入学資格を取得し、ケルン大学、ゲッティンゲン大学、ケンブリッジ大学で学んだ。専攻は哲学と歴史学であり、1953年にケルン大学で哲学博士号を取得した時の論文題目は、「ヘーゲル初期論集における実定性とキリスト教」であった。初期ヘーゲルの神学論集を扱ったこの博士論文は未公開に留まっているが、現在でもケルン大学で閲覧・複写することが出来る<sup>13)</sup>。この処女作には、ニッパードアイのフランス革命期への興味が滲み出ているが、それはまだ哲学史研究の枠内に留まっており、後年の歴史研究とは趣を異にしていた。なお、のちにニッパードアイはヘーゲルの哲学について、繰り返し「歴史の哲学」で

あり、「政治的なるものの哲学、国家と社会の哲学」と特徴付けている<sup>14)</sup>。政治思想研究は後年のニッパードの研究上の一分野となり、ヘーゲル以外にトーマス・モア<sup>15)</sup>やカール・ベルンハルト・フンデスハーゲン<sup>16)</sup>の分析を行っている。

その後主専攻を歴史学としたニッパードは、1954年から1957年まで「議会制及び政党の歴史」委員会の奨学生となり、1957年から1963年まではゲッティンゲンのマックス・プランク歴史学研究所で研究助手を務めた。ニッパードは1961年にゲッティンゲンで教授資格を取得したが、教授資格論文の題目は『1918年以前のドイツ諸政党の組織』で、同年公刊されている。この著作は、ドイツ帝国における各政治党派、とりわけ自由主義陣営と社会主義陣営の組織形態を比較検討したもので、ケルン大学教授テオドル・シーダーに謝辞が献呈されている<sup>17)</sup>。その後のニッパードは、1962年にギーゼン大学の講座を代行したのち、1963年にカールスルーエ工科大学の講座を正式に担当し、1967年にベルリン自由大学フリードリヒ・マイネッケ研究所近代史正教授に就任した<sup>18)</sup>。ちなみにニッパードがこうした就職までの過程で、ヴェーラーやモムゼンのように「歴史家ツフト」の恩顧に恵まれたかどうかは、回顧談などもなく分からない。ニッパードはシーダーの祝賀論文集や追悼論文集に参加し、教授資格論文にもシーダーへの謝辞が見られるので、シーダーとはある程度の繋がりがあったものと推測される。古今東西を問わず、いつも恩顧・縁故が支配する学界では、それに一切関係せずに実力だけで就職に到る道は、いずれにしても閉ざされている。ただヴェーラー、モムゼンが躍起になってシーダーを擁護したときのような一体感が、ニッパードと特定の師範、学派との間にあったという形跡は見つかっていない。西独法学界の長老の御曹司ニッパードは、あるいはヴェーラー、モムゼンよりも学界での立場が有利だったのかもしれない。

若きトーマス・ニッパードにとって、ベルリン自由大学への栄転は大いなる僥倖であった。後述の通りニッパードはベルリン自由大学やベルリンという都市に愛着を感じていたが、それは彼の数々のプロイセン論にも反映されている。一般にニッパードと言うと、「ミュンヘン大学の保守的歴史家」という先入観から、バイエルン志向、キリスト教社会同盟(CSU)の論客、カトリックと誤解されがちだが、実際にはプロイセン志向、社会民主党(SPD)の論客、プロテスタントなのだった。ニッパードが

憧憬したプロイセンとは、知的側面から見たそれである。1981年にニッパードアイは、1810年創立のベルリン大学を「真の、目的から自由な学問」の揺籃の地と、当時のプロイセン国家を「自由の代理人」、「精神の国」と大々的に称揚した<sup>19)</sup>。1987年には、ニッパードアイは学問と経済との関係から見たベルリンの歴史、とりわけ（マックス・プランク協会の前身とされる）皇帝ヴィルヘルム協会の設立に到る経緯を論じている<sup>20)</sup>。またニッパードアイの社会民主党観を知る手掛かりは少ないが、彼がそれを労働者政党、マルクス主義政党としてではなく、ベルリン大学やプロイセン国家と同様、知的側面から肯定していたことが、以下のような文章からは感じ取れる。「社会民主党は理性への義務を負った政党である。この理性には、過去を学問的に解明することが含まれる。というのも、そうすることによってのみ、現代の理性的意識が確かなものになり得るからである。」<sup>21)</sup>。宗派もニッパードアイが繰り返し扱ったのはプロテスタンティズム、とりわけルターと農民戦争で、カトリシズムが正面から扱われることはなかった。ルターに関しては、ニッパードアイはその観念世界が現代のそれと大きく異なることを指摘しつつも、世界の近代化への基礎的貢献を強調している<sup>22)</sup>。

歴史家トーマス・ニッパードアイの最初期は、教授資格論文に代表される近代政党組織研究に費やされた。1958年『史学雑誌』に掲載された彼の初公刊論文は「1918年以前のドイツにおける市民的諸政党の組織」であり、教授資格論文刊行前後に類似の題目で多数の論文を発表している。これと並行して1961年からニッパードアイの西ドイツの社会政策への言及が始まり、同年にはヴァイマル共和国の学生団体の研究も発表されている。1962年にはニッパードアイの近世政治思想研究が始まり、やがて宗教改革研究へと移行していった<sup>23)</sup>。

こうしたなかトーマス・ニッパードアイのナショナリズム研究は、漸く1968年から姿を見せるが、その切掛は国民記念碑研究という文化史的なものであった。同じころヴェーラーが、ドイツ帝国の少数民族政策を批判していたのと比較すると、ナショナリズムへの取り組み方の違いは明らかである。1968年の『史学雑誌』掲載論文「19世紀ドイツの国民理念と国民記念碑」は、カールスルーエ大学時代の同僚で美術史家のクラウス・ランクハイト（1913-1992年）から刺戟を受けたもので、ベルリンの老フリッツ騎馬像、ニーダーヴァルトのドイツ統一記念碑、ケールハイムの解放記念堂、レーゲンスブルクのヴァルハラ、デートモルトのヘルマン記念碑、

ライプツィヒの諸国民戦争記念碑、ベルリンの大聖堂、ケルンの大聖堂、ポルタ・ヴェストファリカのヴィルヘルム大帝像、コブレンツ（ドイチェス・エック）のヴィルヘルム大帝騎馬像（当時は未復興）、ハンブルクのビスマルク立像など、19世紀の多くの国民記念碑を回顧しながら、そこに込められた右派・左派の政治的意図を読み解くというものである<sup>24)</sup>。この論文を皮切りに、ニッパードはケルン大聖堂、ヘルマン記念碑などについての個別研究を更に発表していくことになる。

ところが国民記念碑の研究を始めたころ、トーマス・ニッパードはベルリン自由大学で容易ならざる状況に置かれていた。1968年から1969年に同大学哲学部長を務めていたニッパードは、学生叛乱の矢面に立たされたのである。ミュンヘン大学へ移動することになったニッパードは、1971年11月9日の新聞『ヴェルト』に、(西)ベルリン市学問・芸術担当市参事会員（州文相に相当）ヴェルナー・シュタイン（SPD）宛の書簡を公表した。ニッパードはここで、自分がベルリンを愛し、ベルリン自由大学での知的活動、ベルリンでの社会民主黨員としての活動に非常に期待し、三つの大学からの招聘を断ったのに、いまこの大学を去らざるを得なくなったことを残念として、その理由を披露した。ニッパードは、ベルリン自由大学で実績重視の原則が失われ、試験規則が操作され、「急進派の怠け者と非才者との同盟」が利益を得たとし、叛乱学生側を厳しく批判した。同時にニッパードは、「封建領主」のような学長（助手から学長になったロルフ・クライビヒ<sup>25)</sup>）がベルリン市政府や市議会が決めた大学改革に抵抗し、民主主義の名の下に自由で効果的な研究・教育が損なわれ、ベルリン自由大学は「赤い象牙の塔」、ヨーロッパで最も不自由な大学になったとし、学生叛乱に妥協した大学幹部への不満を表明したのだった（ちなみにニッパードはここで、オットー・ズール政治学研究所の同志として、「ヴィンクラー」を挙げている<sup>26)</sup>）。1968年のベルリン自由大学におけるニッパードの立場は、同年にテュービンゲン大学カトリック神学部長として学生叛乱に遭遇したヨーゼフ・ラッツィンガーのそれとよく似ている。両者は共に、こののち時流に抵抗する「保守派」知識人とされるようになったのだった。

テロリズムへと転化していく学生叛乱を、トーマス・ニッパードは憤りをもって見つめていたが、彼の怒りは「進歩的」学生に迎合する大学側にも向けられた。1977年に『ヴェルト』に掲載された論文「大学の共同

責任」で、ニッパードアイは現状批判を絶対視し、暴力の行使も厭わないという独善的なイデオロギーの担い手が大学で影響力を行使し、その考え方が高等教育にまで反映されつつあるとの認識を示した。「改革による大学機関の政治化はその対価を要求している。それは新左翼の言う意味での政治化である。大学の一部は反デモクラシー的機関になってしまった。そうした改革を訴える教師が職に就き名誉を得ている。」<sup>27)</sup>

学生叛乱に呼応した大学「改革」に研究・教育の危機を感じたトーマス・ニッパードアイは、同志と共に「学問の自由同盟」(Bund Freiheit der Wissenschaft)を創設した。「フランクフルト・サークル」(1968年10月)、「ベルリン自由大学のための危機共同体」(1969年12月)などの前哨を経て、1970年秋に「学問の自由同盟」の創立が宣言された。この宣言では、現存秩序を破壊することでユートピア的目標の実現を求めるイデオロギーが大学の知的活動を抑圧し、誹謗中傷や暴力を拡大させ、大学を「後期資本主義」社会に対する絶滅戦争の実験場にすることに懸念が表明されている。この宣言文にはニッパードアイのほか、ヴィルヘルム・ヘンニス、リヒャルト・レーヴェンタール、ヘルマン・リュッベ、ハンス・マイヤー、エルンスト・ノルテ、フリードリヒ・テンブルックなどが署名している<sup>28)</sup>。

トーマス・ニッパードアイは元来ドイツの大学生の在り方に強い関心を懐いており、すでに1961年の論文「ヴァイマル共和国初年のドイツ学生団体」で、一世代前の先例を挙げつつ同時代の学生自治を批判している。ここでニッパードアイは、戦後の生活支援、学生の利益代表、大学運営への参加など、共和制下で認められた学生の権利を活用したヴァイマル期学生と比較して、1961年当時の学生自治が明確な課題を欠き、参加も少ないことを批判していた。当時のニッパードアイは、まだ10年後の学生運動が自分たちの脅威になり得ることを認識していなかったのかもしれない。ただ後年まで一貫したことだが、ニッパードアイが学生と教師との知的交流を肯定し、両者の階級闘争を当然視しない様子はすでに見取れる<sup>29)</sup>。

1968年の学生叛乱は、トーマス・ニッパードアイを取り巻く環境変化の一端に過ぎなかった。ニッパードアイの活動の舞台である西ドイツ歴史学界も、1960年代に根本的な環境変化に見舞われていた。フィッシャー論争は第一次世界戦争開戦時、ドイツ国内に侵略的意図が広く充満し、ベートマン・ホルヴェークの帝国指導部も例外ではなかったことを明らかにした。けれども実証研究上の対立は論争の表層に過ぎなかった。1960年代

の学界変容の本質は、ナショナリズムに取り憑かれ「批判的」な若手研究者を抑圧する「歴史家ツンフト」を打倒するとして、戦後に擡頭したヴェーラーやモムゼンら1920-40年代生まれの世代が、年配世代から西ドイツ「政治教育」の主導権を奪取しようとした学界内権力闘争であった。これ以降、ドイツの歴史家は反ナショナリズム、自由、民主主義といった「公共」の必要事に奉仕する当然の義務があり、道徳が全てに優先するという雰囲気が、長くドイツ連邦共和国の学界を支配することになる。しかも対立は、西ドイツ国内には留まらなかった。ヴェーラーやモムゼンら「ドイツ社会史派」は、予てからドイツ「歴史家ツンフト」の批判者だった戦勝国英米の学界と連携し、英米圏との公私に互る近接性を西ドイツ国内での権力資源にした(もっともこれはニッパードも同じで、プリンストン大学応用研究センター(1978年)、スタンフォード大学行動科学応用研究センター(1988-1989年)に滞在したことを主著『ドイツ史』跋文で繰り返し書いている<sup>30)</sup>)。「ドイツ社会史派」は英米「社会科学」を歴史学に導入し、英語圏の文化的権威を西ドイツ国内で体現し、非英米的でドイツ的と思われた学問的伝統を過去の遺物として嘲笑した。社会主義圏や英米圏に親近感の強かった戦後日本のドイツ史研究者たちも、ヴェーラーらの運動に熱狂して彼らと人的交流を深め、その学説を一方的に輸入した。つまり西ドイツ歴史学界は、世界中から白黒図式で論評され、落ち着いて実証研究に専念する環境ではなくなっていったのである。

こうしたなかトーマス・ニッパードが反「ドイツ社会史派」の旗幟を鮮明にしたのは、1974年に同派創刊の新雑誌『歴史と社会』に掲載されたヴェーラー『ドイツ帝国』の書評においてである。ニッパードはフィッシャーの流れを汲み、ドイツ帝国を「半絶対主義的表見的立憲君主制」と表現したシーダー門下の後輩ヴェーラーに激怒した。ニッパードは、ハーバーマスら「フランクフルト学派」に依拠し、ドイツ帝国をファシズムの前段階、ドイツ史の重荷として見る「批判的」歴史学を当然視する余り、歴史叙述における価値判断の排除を過去の「弁護」と同視して断罪するヴェーラーを、「トライチュケの再来」(Treitschke revidius)として批判した。ニッパードは、本来多様であるはずの歴史の連続性のうちファシズムへの連続性だけを誇張していること、ヴェーラーの前著『ビスマルクと帝国主義』で出された「社会帝国主義」テーゼを、ジェフ・イリーらの批判を顧みずに当時の政治全体に一般化したこと、保護関税政策、ナショナリズ

ム、反ユダヤ主義などを「支配層」の権力維持の道具として機能主義的に解釈したこと、軍部や官僚、諸領邦など内部に多元性があった「支配層」を無邪気に一体のものとして扱っていること、ドイツ帝国50年間の社会的・政治的変容を軽視していることなどを挙げ、ヴェーラー、W・モムゼンら「ドイツ社会史派」らに正面から宣戦布告したのであった<sup>31)</sup>。

「ドイツ社会史派」の政治化した歴史研究が擡頭するにつれて、トーマス・ニッパードアイは歴史学の客観性を擁護する議論を展開した。その端緒は、1974年2月21日のフランクフルト歴史・地域研究協会での講演「批判か客観性か?——1848年の評価について」に見られる。この講演でニッパードアイは、三月革命の失敗における市民層の責任を論じることの意味を扱いつつ、彼の客観性論の概要を披露しているが、後年のものと比較するとまだ萌芽的であった<sup>32)</sup>。1979年、トーマス・ニッパードアイは学生・歴史教師向け講演をもとに論文「歴史は客観的たりうるか」を発表し、この問題についての自己の立場を体系的に整理した<sup>33)</sup>。

歴史学の客観性を論じるに当たり、トーマス・ニッパードアイは近代歴史学の祖レオポルト・フォン・ランケに立ち返り、歴史に客観的な言明が出来ないのなら、歴史学はもはや学問であることを止めてしまうと訴えた。ここでいう客観的とは、当該の歴史学の知見が分析対象から生じたもので、異なる主観を持つ人々の間でも検証可能、伝達可能、意志疎通可能な状態だという(加えてニッパードアイは、ここで自分たちの課題はもはやランケのような「どう」(wie)だったかだけでなく、「なぜ」(warum) そうだったかでもあると述べ、ランケよりも一步踏み込んで歴史研究を行う姿勢を示しているが、これについてはここでは置いておこう)。

一方でトーマス・ニッパードアイは、反客観性論者の論拠を整理し、客観的歴史叙述が容易でないことを認めた。まずニッパードアイは、以下の「論理的論拠」を挙げている。(1)歴史叙述者自身が立場の制約を負っていること。(2)史料が不完全で過去の出来事を全て記録しているわけではないこと。(3)常に論題の選別が主観的に行われ、史料の解釈や問題提起の方法にも主観が入りうること。(4)歴史叙述者は歴史の結末を予め知っており、そこに向かって歴史を描くために、多くの事実のなかから「意味のある」(relevant)ものを選別していること。だがこれに続いてニッパードアイは、反客観性論者の「道義的論拠」を紹介しており、これには距離を置いている。(5)客観性は「宦官のよう」(グスタフ・ドロイゼン)であり、そもそも目標です

らない。人間は対立において中立ではいられないのであり、旗幟を鮮明にするのが道義的義務である。歴史家には自分の社会の政治教育者としての責任がある。(6) (マルクス主義のように) 世界史には法則が存在し、「客観的目標」(国民国家、自由主義的憲法、民主主義、帝国主義、社会主義など) があって、この目標に向けた「客観的進歩」を推進するのが進歩派、実践理性の代理人たる歴史家の役割である(言わば政治的関与と客観性との両立を図る試み)。

他方でトーマス・ニッパードは、価値判断に関してマックス・ヴェーバーやカール・ポパーの立場を共有し、学問は存在(Sein)の問題に答えを出すのみで、当為(Sollen)の問題に答えを出すことができない、その問いに答えを出した場合、それは主観的なものになると明言した。ニッパードは、学者にはその共同体のなかで学問のあり方に関する基本的共通了解——宗派、人種、性別などに関係なく議論は尊重されなければならない、というような——を必要とするが、それは飽くまで「基盤的倫理」「最小限倫理」であり、この具体的問題に対する価値判断ではない。いずれにしても左派のように、学者は平等な「支配から自由な」社会を支持する義務があるなどと主張するのは不適當だという。要するにニッパードは、学問の権威を借りた価値判断を野放しにすることで、学問が済し崩し的に政治化することを懸念したのである(但しニッパードは、ヒトラーのような世界史的例外現象には、道徳的判断も止むなしと述べている。)。ニッパードはまた、客観性志向の歴史学は現実肯定的、弁護論的になりがちとの批判も取り上げ、その危険性は認めつつも、価値判断から自由な歴史学はそうした弁護論からも自由になれるはずとした。

結局トーマス・ニッパードは、歴史学の客観性に限界があることを認めつつも、可能な限り客観的な歴史学を目指すという規範意識が必要であり、それを否定して歴史学の政治化を当然視することは乱暴であるという結論を出した。無邪気なリアリズムを批判するために、従来繰り返し歴史家の立脚点の制約を指摘してきたが、余りにもそればかりを言い過ぎて、歴史学の客観性まで否定するようになったのは不適切だったというのが、ニッパードの見解であった。またニッパードは分析動機と叙述内容との混同を戒め、前者は価値判断と不可分だが、後者に関しては客観性を要求できるはずだとした。ニッパードは神の偉大さを示すという動機で物理学の法則を探求したニュートンの例を挙げ、「神の偉大さ」に無関心で

もニュートン物理学の妥当性を議論できるはずだと主張したのである。

最後にトーマス・ニッパードアイは、価値判断の排除は歴史家の政治的・社会的加担を無にするという批判を取り上げ、これを退けている。ニッパードアイは歴史家も政治的、社会的加担をするべきだとしたが、もしそれを客観性の彼岸で行うなら、歴史の名の下に先入観を繰り返し、現在と未来を固定化させるだけだと訴えた。過去についての真実を提供し、現代の意義を考える契機を与えることが、歴史家の加担だとニッパードアイは主張したのである。

トーマス・ニッパードアイは、ドイツ連邦共和国の社会科教育が左派知識人の教育独裁の場に変容していくことを危惧した。1973年、ヘッセン州文部省が社会科教育要綱(上級学務顧問官イングリット・ハラール／上級学務顧問官ハルトムート・ヴォルフ編)を発表した時、哲学者ヘルマン・リュッベと共同で評価書を執筆したニッパードアイは、州文部大臣とそれに従う「進歩主義的マンダリンたち」を批判する言論活動を展開し、これを実質的撤回へと追い込んだ<sup>34)</sup>。当時ヘッセンの州首相はアルベルト・オスヴァルト (SPD)、州政権は SPD・FDP (自由民主党) の連立であり、州文相ルートヴィヒ＝フェルディナント・フォン・フリーデベルク (SPD) はフランクフルト社会研究所のテオドル・アドルノのもとで教授資格を取った社会学者で、「機会の平等」を唱道してギムナジウムの解体による「総合学校」の設立を図った人物である<sup>35)</sup>。ニッパードアイがこの社会科教育要綱についてとりわけ問題視したのは、「紛争」(Konflikt)を社会の唯一の真理であるかのように見て、徒に既成秩序への反抗へと生徒を駆り立てていることであった。ニッパードアイは「紛争」を社会の一要素としては認定したが、「合意」、「自明とされる事柄」、「法・平和秩序」、「協力」といった別な要素を度外視する社会像を疑問視し、ジャコバン派を論じたときのヘーゲルに倣いこれを「疑惑の支配」と呼んだのだ<sup>36)</sup>。ニッパードアイのもう一つの批判点は、家庭など社会的不平等のある私的領域から生徒を引き出し、左派的「強制的同質化」に晒す場として学校が位置付けられていることであった。ニッパードアイはこうした教育政策が、生徒を「官憲国家的」な「操作」の対象にしか見ていないと批判している。最後にニッパードアイは、この左派的横暴に対する「市民」の蜂起を呼び掛けている。「画一化された学校と画一化された要綱の社会像・人間像は、我々の多元主義的で、寛容で自由なデモクラシーにとっての脅威である。ここで全ての関

係者、全ての市民の抵抗が求められている。」<sup>37)</sup>。

トーマス・ニッパードは1970年代当時における歴史学軽視の潮流を憂慮した。ニッパードは、文部行政の一部に教育現場における「歴史」の科目としての独立性を奪い、「政治」や「社会」科と統合する動きがあること、扱う歴史をフランス革命以後の近現代史に限定しようとする動きがあること、歴史の彼岸で今日的なもの、新しいものを信じて疑わない傾向があることに警鐘を鳴らした<sup>38)</sup>。

1988年5月ローマでのシンポジウムで、トーマス・ニッパードはドイツ社会における歴史の役割変化を以下のように整理している。(1)革命と改革の時代になって政治は君主、貴族、官僚だけのものではなく、国家なき国民の代弁者として大学が擡頭するようになった。(2)1830年ころから哲学に代わり歴史学が指導的になり、歴史学教授の著作、新聞記事、演説に注目が集まった。歴史が大学から社会へと波及し、ヘルマン記念碑やヴァルハラのような歴史的記念碑が建立され、「我々はカノッサには行かない」のような歴史を引用した政治演説が直ちに理解された。革命が連続性を遮断したので、もはや世界を変わることなき神の作品として理解することが出来なくなり、歴史、つまり生成する過程として把握されるようになった。歴史はあらゆる政治党派にとって論拠を提供するものであった。歴史は歴史主義の誕生以来、人生を導く力であるばかりでなく、ランケ流の厳密な史料批判を伴う、イデオロギーから自由な学問となった。歴史の役割が頂点に達したのは、小ドイツの歴史学が影響を發揮した1848年から帝国建設までである。なかでもトライチュケらは、ランケの価値判断排除を「宦官のよう」と批判し、歴史家の政治的党派性を当然視した。小ドイツ派に属さない別な政治潮流も、自らの政治的立場を歴史的に理由付けた。(3)文化闘争が沈静化した1880年以後は、歴史の役割が低下していった。歴史の学問的性格の強化で人生の指針としての意味を弱め、歴史主義の価値相対主義もこの傾向を強めた。歴史は議会政治の場からは撤退したが、大半の歴史家は「ドイツ特有の道」の意義を確信し、マイネッケ、トレルチュらはのちに「理性的共和派」となった。(4)1919年に始まる第三期には、歴史家は現実政治からは撤退していったが、国民至上主義的傾向の担い手となり、「ナチス」ではなかったが共和国支持派ではなかった。(5)ドイツ連邦共和国では、歴史家はもはや何ら大きな役割を果たしていない。確かに基本法制定者たちは歴史から教訓を引き出したが、もはやそれは職業的

歴史家の仕事ではなくなっていた。自己陶酔的な歴史理解、つまり自国の歴史的連続性から肯定的なものを引き出すことが出来なくなった。テレビの登場も歴史家以外の「預言者」を担ぎ出し、歴史学より心理学や社会学がもてはやされた。但し国民社会主義の過去と向き合う際には、あるいはドイツ・アイデンティティを問う際には歴史家が拘わったが、基本的にドイツ連邦共和国の政治文化は歴史によっては規定されていないし、歴史家によっては全く規定されていない。以上のようなニッパードイの総括には、歴史家として社会に十分に影響を發揮できないという彼の苛立ちが滲み出ている<sup>39)</sup>。

1986年、ユルゲン・ハーバーマスが『ツァイト』で「歴史家論争」と呼ばれる政治論争を開始し、エルンスト・ノルテら歴史家が「ナチズム」の過去を相対化したと非難すると、以前からノルテと「学問の自由同盟」で活動していたトーマス・ニッパードイは<sup>40)</sup>、『ツァイト』掲載の論文「疑惑の支配のもとで」で懸念を表明した。ニッパードイは、ハーバーマスがノルテ、シュテュルマーら様々な方向性の歴史家たちに、纏めて「修正主義者」、「NS 弁解者」の烙印の押したと憤慨し、絶えざる歴史観の修正は自由であり義務であり、政治的「機能」で学問を評価するのは誤りだと主張した。「私はハーバーマスによって開始された議論を不幸と考えている。[……] 学問並びに自由な文化がよって立つ土台は十分狭いものである。そのため我々は、歴史学的美徳、つまり冷静さと距離を必要とする。我々は、道徳主義化する疑惑と政治的党派性の彼岸で、多様性を必要とする。我々は、まさしく道徳的観点から、道徳絶対主義に抗するプラグマティズムを必要とするのである<sup>41)</sup>。」

この「歴史家論争」のころから、トーマス・ニッパードイはドイツ国民理念への一方的批判に苛立ちを表明するようになっていく。1987年の論文「革命時代の神話」で、ニッパードイは次のように述べている。「我々はドイツ人の反国民的な自惚れ自信家たちから身を守らなければならない。ナショナリズムは、「国際連合」(die Vereinten Nationen)の時代である今日、なお世界の運命である。長いことナショナリズムは、偉大な進歩的解放運動の一つだったのである<sup>42)</sup>。」ニッパードイはこの論文で、ネイションという理念を全ヨーロッパ的な現象として扱い、ハーバーマスのように比較政治研究を「過去の相対化」として道義的に否定する立場とは一線を画していた。その際ニッパードイは、ネイションが右派とも左派とも

結びつく融通無碍な理念であることに常に関心を懐いていた。ニッパードはネイション理念が合理主義的には割り切れない「神話」であることを認めるが、同時に「神話」の打破を標榜する「理性と革命」もそれ自体一つの「神話」に転化したことを、ロベスピエールの創出した理性信仰の例を挙げつつ指摘したのだった。

1989年11月9日、長く不可能に思われた「ベルリンの壁」崩壊が現実のものとなり、翌年10月3日に東西ドイツ統一が実現すると、トーマス・ニッパードは歓呼の声を上げた。ニッパードは統一への道筋が整った1990年7月13日、『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトUNG』に記事「ドイツ人は一つの国民であることを望み、一つの国民であることを許される——ポストナショナル論者の傲岸不遜に抗して」を発表する。これはニッパードが参画した「1990年ヴァルトブルク会」(Wartburgtreffen 1990)において、彼が演説した原稿を纏めたものである。ニッパードは「Wir sind das Volk」、「Deutschland einig Vaterland」と訴えた東独反体制運動から、ヴァルトブルク祭(1817年)までの「民主的でナショナルな」運動の伝統を回顧し、「民主的なものとナショナルなものは、この歴史において一致した」と説いた。ニッパードは道義的反統一論者のギュンター・グラスやハーバースへの対抗意識を露わにしながら、ネイションを極力デモクラシーと結び付け、またネイションが「ヨーロッパ標準」であることを強調しつつ、東独から起った統一への呼びかけを擁護したのである。同時にニッパードは、ドイツ帝国の連邦主義がヨーロッパに影響を与えた「業績」であるとし<sup>43)</sup>、その意味でヒトラーを「ドイツ国民国家の完成者ではなく、破壊者」と呼び、ヒトラー暗殺未遂者シュタウフェンベルク伯爵の最期の叫びである「神聖なるドイツ万歳」を引用した。その上でニッパードは、ドイツの過去が今後も過剰なナショナリズムへの戒めとなり続けること、統一ドイツが文字通りの主権国家ではなくヨーロッパ統合や米ソ緊張緩和の枠内に置かれることを当然とし、その意味でドイツが「ヨーロッパ標準」から外れることを必要とした。更にニッパードは、東西ドイツ統一が東ドイツ諸州の西ドイツへの加盟という形式(基本法23条)を取ることを認識しつつも、それは飽くまで西ドイツの東ドイツ「併合」(Anschluß)ではないと主張し、反統一論者の「併合」批判を一面的な感情論として峻拒したのであった<sup>44)</sup>。

統一直後の1991年、雑誌『ウニヴェルシタス』のインタビューで、トー

マス・ニッパードアイはドイツ統一を肯定し、批判を退けようとした。ニッパードアイはきわめて率直にドイツ統一を寿ぎ、これでドイツは「ヨーロッパ標準」(europäische Normalität)へ復帰したと説明した。ニッパードアイは、一つの民族が一つの国民、一つの国民国家のなかに住むのは世界で最も普通のことであり、「国民至上主義的雰囲気」が生じる危険性は「きわめて少な」く、ドイツの脅威を不安がるのは当たらないと断言した。ニッパードアイはまた、ドイツ東部の喪失と東欧からのドイツ人難民の流入により却って民族混住が解消されたとし、これを「不幸中の幸い」とまで呼んだ。ニッパードアイは過去の責任を忘却することを戒めたが、同時にヒトラーの問題関心は「国民」(Nation)ではなく「人種」(Rasse)だったとし、「ナチズム」と「国民」との距離を強調して見せた。ニッパードアイは、統一により旧西ドイツが消滅したと嘆くニクラス・ルーマンには同意しなかったが、同時に旧東ドイツだけが消滅して連邦共和国に吸収合併されたという考え方も否定し、ドイツ統一の対等性を強調した<sup>45)</sup>。

このインタビューで更に注目されるのは、トーマス・ニッパードアイの東ドイツ評価である。ニッパードアイはドイツ統一に際し、とりわけ「向こう側」の人々への祝意を表明した。その背景には、国民社会主義体制と東ドイツ社会主義体制とを共に「全体主義的、人間敵対的、自由敵対的な体制」とするニッパードアイの評価があった<sup>46)</sup>。ニッパードアイはまた「新五州」(ベルリンは除外されている)の学問的状况を1945年のそれに譬え、今後の課題として「シュタージ文書」の検証を挙げるとともに、これを「ゲシュタポ文書」の検証と「直接比較」している。けれども同時にニッパードアイは、東ドイツ崩壊は社会主義圏全体に拘わるものであること、民衆が立ちあがったことなどを挙げ、「非ナチ化」と平行する過程は「恐らく必要ない」とした。ニッパードアイは更に、東ドイツの歴史家たちにも言及している。東独歴史学については、ニッパードアイは予め「農民戦争」の解釈などを事例として、「西側」歴史学と比較したその硬直性を厳しく指摘していた<sup>47)</sup>。だが統一後のニッパードアイは、彼ら東独歴史家たちの体制イデオロギーへの迎合には様々な度合、形態があること、東ドイツで一般的だった普遍的アプローチが今後活用可能であることなどを指摘し、今後の西ドイツ歴史家との対話に期待を滲ませた。同時にニッパードアイは、旧体制派の東ドイツ歴史学界指導層の排除し、東ドイツ出身の若手歴史家を西側世界で育成することを訴えた<sup>48)</sup>。

東西ドイツ統一には熱狂したトーマス・ニッパードだったが、彼は  
大ドイツ主義にはきわめて冷淡であり、東ドイツ以外のドイツ語圏の統  
合には興味がなかった。1988年3月12日、ニッパードは「合邦」50周年  
を機に『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング』に寄稿し、こ  
れを「大ドイツ的夢想の終焉」と題した。ニッパードは、自分たちは「ト  
ラップ一家」のように「ナチス・ドイツ」への併合に抵抗した被害者だ、ベ  
ートホーフェン（ボン生まれ）はエステルライヒ人だがヒトラー（ハプス  
ブルク帝国領ブラウナウ生まれ）はドイツ人だというような、戦後エステル  
ライヒ人の御都合主義的歴史解釈を一蹴し、「合邦」後の国民投票ではカ  
トリック聖職者や社会民主党指導者の賛同も得て99%が賛成票を投じた  
事実を指摘した。東ドイツ人に対して向けたような一体感の表明は、同時  
代のエステルライヒ人に対しては微塵もなく、冷めた言葉だけがニッパ  
ードの文章を彩っていた<sup>49)</sup>。前述の記事「ドイツ人は一つの国民であるこ  
とを望み、一つの国民であることを許される」でも、東ドイツ以外のドイ  
ツ語圏の新規統合はもはや「再統一」ではないと「大ドイツ」主義を明確  
に否定し、プロイセン東部州などの統合を論外とした。ニッパードはか  
つてのように、ドイツ・イレデンティズムがヨーロッパの不安定要因とな  
ることを戒めたのだった<sup>50)</sup>

しかしトーマス・ニッパードには、もはや統一後ドイツを長く体験す  
ることは許されなかった。1991年10月3日、東西統一後最初の「ドイツ  
統一の日」に、ニッパードは学者人生の総決算となる『ドイツ史』第三  
巻の跋文を執筆した。ニッパードは病魔が迫るなか、最終巻を完結する  
時間を与えてくれた「神に感謝」し、思いもかけずドイツ統一を体験でき  
たことを「幸福」とした。更にニッパードは、自分のような歴史家は、  
先人の業績を踏まえて歩むものであり、同志、批判者、家族などにも負っ  
ているとして謝辞を述べた<sup>51)</sup>。それから半年余り経った1992年6月14日、  
ニッパードはこの世を去った。生前ニッパードは1984年にミュンス  
ター市歴史家賞、1989年に連邦功労十字章を授与されていたが、死去し  
た1992年には更にバイエルン功労勲章、ドイツ歴史家賞を追贈されてい  
る<sup>52)</sup>。

## 注

- 1) 渡辺浩「いつから「国民」はいるのか」、『UP』第448号(東京大学出版会、平成22年)、1-6頁。渡辺はこの文章を、皮肉を込めてこう結んでいる。「国際政治学者にも、西洋史東洋史の研究者にも、無論、政治理論家たちにも、「日本」史を重要な参照事例とされることを強くお奨めしたい。」(6頁)
- 2) 仲井斌『ドイツ史の終焉——東西ドイツの歴史と政治』(早稲田大学出版部、平成15年)、30頁。分離動詞 *zusammenwachsen* (癒合する) が副詞+動詞 *zusammen wachsen* (共に育つ) と誤解されている。これではあたかもブランドが東西ドイツの統一国家化を批判したかのようにも読まれかねない。「共に属しているものが、共に生きる」(坪郷實『統一ドイツのゆくえ』(岩波書店、平成3年)、51頁。)なども同類の誤訳である。「もともと一緒のものは、一緒になっていけるはずだ」(三島憲一『現代ドイツ——統一後の知的軌跡——』(岩波書店、平成18年)、36頁。)という訳も微妙だが、「癒合する」という分離動詞の意味を正確に捉えられているか疑問が残る。
- 3) 熱心なナショナリズム批判者で、社会主義者の平和運動を研究した西川正雄(東京大学教養学部)も、晩年には実証主義の軽視を警告する立場を取っていた。西川はその最終講義「歴史学の醍醐味」(専修大学)で、「言語論的展開」に疑問を提起し、史料に基づく実証研究の意義を訴えている。この主張の背景には、あらゆる歴史像が歴史家の個人的価値観の投影に過ぎないとすれば、西川が批判して止まない日本の愛国教育運動だけを、取り立てて「学問」の名において否定することが出来なくなるという政治的懸念があった。西川は、史料に基づく実証研究を真摯に進めれば、必然的にナショナリズム批判の価値判断に到るはずと信じていたのかもしれない(西川正雄『歴史学の醍醐味』(日本経済評論社、平成22年)、27-47頁。)
- 4) 大石俊一『英語帝国主義論——英語支配をどうするのか』(近代文芸社、平成9年)。
- 5) 丸山眞男「科学としての政治学」、『丸山眞男集』第3巻(岩波書店、平成7年)、137頁。
- 6) Hans-Ulrich Wehler (Hrsg.), *Deutsche Historiker*, 9 Bde., Göttingen 1971-1982.
- 7) 「歴史主義」は本来ニッパードイラ「伝統史学」派を批判する文脈で専ら用いられた言葉で、彼ら自身の自称ではないが、ニッパードイ自身は「歴史主義」への一面的な攻撃を戒めその遺産を生かそうとする意向を有し、歴史学というものを研究上も教育上もきわめて重視していたので、本論では彼のナショナリズム研究を「歴史主義的」と表現している(Thomas Nipperdey, *Historismus und Historismuskritik heute. Bemerkungen zur Diskussion*, in: Ders., *Gesellschaft, Kultur, Theorie. Gesammelte Aufsätze zur neueren Geschichte*,

Göttingen 1976, S. 59–73.)。

- 8) 木村靖二「ヴェーラー (ハンス・ウルリヒ)」、『20世紀の歴史家たち(4)・世界編下』(刀水書房、平成13年)、387–400頁。
- 9) 筆者が東京大学大学院法学政治学研究科修士課程を終了間近の1997年3月、「ヨーロッパ政治史」担当教授の馬場康雄が強羅でのゼミ合宿(平島健司との共同開催)で、ヴェーラー『ドイツ社会史』第3巻とニッパード『ドイツ史』とを、その書評と共に読み比べるという企画を立てた(この企画には、ニッパードを高く評価していた西川洋一(「西洋法制史」担当教授)が参加を希望したが、企画側から謝絶したと聞いている)。篠原一の「歴史政治学」の忠実な継承者である馬場は、社会構造史の手法に理解のないロタール・ガルのヴェーラー批判に異論を唱えたが、同時に「歴史家としてはニッパードが上ではないか」とも述べて、後者に一定の理解を示した。これに対し同じ篠原門下生の平島は、ヴェーラーの歴史叙述の広範さを激賞したものの、ニッパードには興味を示さなかった。当時別な機会に、筆者は平島に「日本ではヴェーラーが盛んに翻訳されるのに、何故ニッパードは全く翻訳されないのか」と問うたことがあったが、それに対する平島の返答は「需要がない」の一言だった。

筆者は東京大学在学中、文学部西洋史研究室や教養学部ドイツ科とも研究交流を持っていたが、そうした場でニッパードが深く論じられたのを聞いたことは一度もなく、そもそも話題になること自体が稀で、なっても「保守的」という嘲弄が関の山であった。

漸く2008年になって、坂井榮八郎(東京大学名誉教授(教養学部))がニッパードの論文6本を集めた翻訳論文集を単行本として刊行した(『ドイツ史を考える』(山川出版社))。江口朴郎や西川正雄に象徴される戦後のドイツ近現代史研究の左傾化に距離を置いてきた坂井は、編者序文でニッパードを無視してきた日本の研究界を批判し、ニッパードに(そしてそれ以上にラインハルト・コゼレックに)熱烈な共感を示した。だがこの訳書は、Nacsis Webcat(2011年10月1日閲覧)によれば国内の大学図書館では125館にしか所蔵されず(ヴェーラー(大野英二/肥前榮一訳)『ドイツ帝国』は213館)、しかも早々に絶版となっている。平島の診断は立証されたと言わべきだろう。

このほか日本でのニッパード受容は、「反セム主義」論を個人的に紹介、翻訳する文章が大学紀要に掲載されている程度である(大場崇代「第2帝政期のユダヤ人と反ユダヤ人——ニッパード「ドイツ史1866–1918」における見解」、『法学研究』第30巻第3号(平成7年)、477–492頁。トーマス・ニッパード/ラインハルト・リュールブ(宇都宮浩司/古松丈周訳)「歴史概念としての「反セム主義」」、『千里山経済学』第35巻第1号(平成13年)、

- 105-139頁。)。近年流行の国民的記念碑研究でも、先駆者ニッパードイについて僅かに言及される場合があるが、論旨が十分消化されているとは言い難い(大原まゆみ『ドイツの国民記念碑 1813-1913年——解放戦争からドイツ帝国の終焉まで』(東信堂、平成15年)、6、105頁。松本彰「19世紀ドイツの国民的記念碑とナショナリズム」、遅塚忠躬/松本彰/立石博高編著『フランス革命とヨーロッパ近代』(同文館、平成8年)、234頁、など。)
- 10) Thomas Nipperdey, *Der Kölner Dom als Nationaldenkmal*, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 233 (1981), S. 595-613.
  - 11) Thomas Nipperdey, in: *Wer ist wer? Das deutsche who's who*, XXX. Ausgabe, Lübeck 1991, S. 995 (*Wer ist wer? への最終記載*); Thomas Nipperdey, *Lebenslauf* (注13の博士論文の一部)。
  - 12) Reinhard Mehring, *Carl Schmitt. Aufstieg und Fall. Eine Biographie*, München 2009, S. 322, 329 f.
  - 13) Thomas Nipperdey, *Positivität und Christentum in Hegels Jugendschriften*, Diss. Universität zu Köln 1953.
  - 14) Thomas Nipperdey, *Georg Wilhelm Friedrich Hegel. Geschichtliches Bewußtsein und politisches Handeln*, in: Peter Alter/Wolfgang J. Mommsen/Thomas Nipperdey (Hrsg.), *Geschichte und politisches Handeln. Studien zu europäischen Denkern der Neuzeit*, Stuttgart 1985, S. 128.
  - 15) Thomas Nipperdey, *Die Utopia des Thomas Morus und der Beginn der Neuzeit*, in: Karl Dietrich Bracher (Hrsg.), *Die moderne Demokratie und ihr Recht. Festschrift für Gerhard Leibholz zum 65. Geburtstag*, Tübingen 1966, S. 343-368.
  - 16) Thomas Nipperdey, *Carl Bernhard Hundeshagen. Ein Beitrag zum Verhältnis von Geschichtsschreibung, Theologie und Politik im Vormärz*, in: *Festschrift für Hermann Heimpel zum 70. Geburtstag am 19. September 1971*, Bd. 1, Göttingen 1971, S. 368-409.
  - 17) Thomas Nipperdey, *Die Organisation der deutschen Parteien vor 1918*, Düsseldorf 1961.
  - 18) Thomas Nipperdey. *Bibliographie seiner Veröffentlichungen*, München 1993, S. 13, 17 f.
  - 19) Thomas Nipperdey, *Die Idee von der wahren, zweckfreien Wissenschaft. Der preußische Militär- und Verwaltungsstaat und die moderne Universität*, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, Nr. 270, 21. November 1981, Beilage Bilder und Zeiten, S. 1 f.
  - 20) Thomas Nipperdey, *Die Organisation der Wissenschaft im Wilhelminischen Berlin und ihre Beziehungen zur Wirtschaft*, in: *Industrie- und Handelskammer zu Berlin* (Hrsg.), *Berlin und seine Wirtschaft. Ein Weg aus der Geschichte in die Zukunft* -

- Lehren und Erkenntnisse -, Berlin(West)/New York 1987, S. 113-131.
- 21) Thomas Nipperdey, Sozialdemokratie und Geschichte, in: Sozialismus in Theorie und Praxis. Festschrift für Richard Löwenthal zum 70. Geburtstag, Berlin/New York 1978, S. 508.
  - 22) Thomas Nipperdey, Luther und die moderne Welt, in: Geschichte in Wissenschaft und Unterricht, 1985/12, S. 803-813.
  - 23) Bibliographie seiner Veröffentlichungen, S. 17-19.
  - 24) Thomas Nipperdey, Nationalidee und Nationaldenkmal in Deutschland im 19. Jahrhundert, in: Historische Zeitschrift, Bd. 206 (1968), S. 529-585.
  - 25) ロルフ・クライビヒ (1938年-) は、ベルリン自由大学の学長職名が Rektor から Präsident に代わって初めての学長である (任期は1969-1976年)。主として東独の大学で学んだ物理学者・社会学者クライビヒは、学生叛乱の渦中の1969年11月24日に、助手のまま学長に選出された (<http://web.fu-berlin.de/chronik/b-picts/1961-1969/kreibich.html> : 2011年10月3日閲覧)。
  - 26) Thomas Nipperdey, Warum ich die FU verlasse, in: Die Welt, Nr. 261, 9. November 1971, S. 3.
  - 27) Thomas Nipperdey, Die Mitschuld der Universitäten, in: Die Welt, Nr. 244, 19. Oktober 1977, S. 29.
  - 28) [http://www.bund-freiheit-der-wissenschaft.de/downloads/texte/vt\\_010606\\_luebbe.pdf](http://www.bund-freiheit-der-wissenschaft.de/downloads/texte/vt_010606_luebbe.pdf) (2011年10月3日閲覧)。
  - 29) Thomas Nipperdey, Die deutsche Studentenschaft in den ersten Jahren der Weimarer Republik, in: Ders., Gesellschaft, Kultur, Theorie. Gesammelte Aufsätze zur neueren Geschichte, Göttingen 1976, S. 390-416.
  - 30) Thomas Nipperdey, Deutsche Geschichte 1800-1866. Bürgerwelt und starker Staat, München 1983, S. 805; Thomas Nipperdey, Deutsche Geschichte 1866-1918. Bd. I: Arbeitswelt und Bürgergeist, München 1990 (1994), S. 838 f.; Thomas Nipperdey, Deutsche Geschichte 1866-1918. Bd. II: Machtstaat vor der Demokratie, 3., durchgesehene Aufl., München 1995, S. 909.
  - 31) Thomas Nipperdey, Wehlers „Kaiserreich“. Eine kritische Auseinandersetzung, in: Ders., Gesellschaft, Kultur, Theorie. Gesammelte Aufsätze zur neueren Geschichte, Göttingen 1976, S. 360-389.
  - 32) Thomas Nipperdey, Kritik oder Objektivität? Zur Beurteilung der Revolution von 1848, in: Dieter Langewiesche (Hrsg.), Die deutsche Revolution von 1848/49, Darmstadt 1983, S. 163-189.
  - 33) Thomas Nipperdey, Kann Geschichte objektiv sein?, in: Geschichte in Wissenschaft und Unterricht, 1979/6, S. 329-342.
  - 34) Bernhard Sutor, Politische Bildung im Streit um die „intellektuelle Gründung“ der

- Bundesrepublik Deutschland. Die Kontroversen in den Siebziger und Achtziger Jahre, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B45/2002, S. 22.
- 35) <http://idw-online.de/pages/de/news162058> (2011年10月14日閲覧).
- 36) Thomas Nipperdey, Ist Konflikt die einzige Wahrheit der Gesellschaft? Menschen und Gesellschaft in den hessischen Rahmenrichtlinien, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr. 248, 24. Januar 1973, S. 11 f.
- 37) Thomas Nipperdey, Die formierte Schule. Menschen und Gesellschaft in den Rahmenrichtlinien des hessischen Kultusministeriums für Gesellschaftslehre, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr. 249, 25. Januar 1973, S. 12.
- 38) Thomas Nipperdey, Über Relevanz, in: Ders., Gesellschaft, Kultur, Theorie. Gesammelte Aufsätze zur neueren Geschichte, Göttingen 1976, S. 12-32.
- 39) Thomas Nipperdey et al., Das Verhältnis von Geschichte und Politik in der Kultur Italiens und Deutschlands, in: Arnold Esch/Jens Petersen (Hrsg.), Geschichte und Geschichtswissenschaft in der Kultur Italiens und Deutschlands, Tübingen 1989, S. 232-237.
- 40) トーマス・ニッパードイはエルンスト・ノルテの著『その時代におけるファシズム』を『史学雑誌』で概ね好意的に書評していた(Thomas Nipperdey, Der Faschismus in seiner Epoche. Zu den Werken von Ernst Nolte zum Faschismus, in: Historische Zeitschrift, Bd. 210 (1970), S. 620-638.)。「ナチズム」をドイツ固有の原罪として比較政治研究を拒否するハーバーマスとは異なり、ノルテはそれをファシズムという近代ヨーロッパの時代現象として見ており、マルクス主義との相互作用にも言及している。これはナショナリズムを常に「ヨーロッパ標準」として扱うニッパードイのナショナリズム論とも手法的に一脈通じるものがあると言えよう。
- 41) Thomas Nipperdey, Unter der Herrschaft des Verdachts, in: Die Zeit, Nr. 47, 17. Oktober 1986, S. 12. この論考はのちにピーパー社が編集した論文集『「歴史家論争」』に採録された(„Historikerstreit“. Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung, München 1987.)。ところが42本の論文を掲載したこの論文集が邦訳されたとき、ニッパードイの文章を含む26本が「出版事情」を理由に削除されていた。熱狂的なハーバーマスの礼讃者で、彼と交友関係にあるという編訳者代表・三島憲一は、「訳者の序」でこう記している。「選別にあたってはフェアネスを原則として、日本で多く紹介されているハーバーマスの議論だけでなく、彼が批判的にしているノルテやシュテュルマーのそれも、十分知ることができるようにした。それゆえ、自分の意見になじまないものを訳すという、あまり楽しくない仕事を訳者の方々をお願いすることになってしまった。」(J・ハーバーマス/E・ノルテ他(徳永恂/三島憲一他訳)『過ぎ去ろうとしな

- い過去——ナチズムとドイツ歴史家論争』(人文書院、平成7年)、1-2頁。)ニッパードらを除外し善悪二項対立を際立たせようとする「選別」が「フェア」であるかも異論の余地があるが、編集上の中立が前提である史料集刊行に際して、学界を代表する立場の記者が、自らの好き嫌いを冒頭で無遠慮に公言してしまい、それを誰も問題視しないところに、日本のドイツ研究界の権威主義的体質が現れている。
- 42) Thomas Nipperdey, *Der Mythos im Zeitalter der Revolution*, *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, 1987/6, S. 329.
- 43) ニッパードはドイツの連邦主義について、その柔軟な統合力を強調し、その将来性を評価する論文を発表している (Thomas Nipperdey, *Der Föderalismus in der deutschen Geschichte*, in: Ders., *Nachdenken über die deutsche Geschichte*, München 1986, S. 60-109.)。
- 44) Thomas Nipperdey, *Die Deutschen wollen und dürfen eine Nation sein. Wider die Arroganz der Post-Nationalen*, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, Nr. 160, 13. Juli 1990, S. 10.
- 45) Thomas Nipperdey, „Der Abschied von der Utopie wird die nächsten Jahrzehnte bestimmen“, in: *Universitas* 46 (1990), S. 184-193.
- 46) ニッパードは1985年6月トゥツィング福音アカデミーでの講演「歴史的視角から見たドイツ統一」でも、1945年に解放されたのは「部分的にのみ」、つまり西ドイツだけだとし、東ドイツを「ソヴィエトの戦車に守られた全体主義的警察共産主義」と呼んでいた (Thomas Nipperdey, *Die deutsche Einheit in historischer Perspektive*, in: Ders., *Nachdenken über die deutsche Geschichte*, München 1986, S. 215.)。
- 47) Thomas Nipperdey, *Bauernkrieg*, in: Peter Blickle (Hrsg.), *Der deutsche Bauernkrieg von 1525*, Darmstadt 1985, S. 78-109.
- 48) Thomas Nipperdey, „Der Abschied von der Utopie wird die nächsten Jahrzehnte bestimmen“, in: *Universitas*, 2/1990, S. 184-193.
- 49) Thomas Nipperdey, *Das Ende des großdeutschen Traums*, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, Nr. 61, 12. März 1988, *Bilder und Zeiten*, S. 1 f.
- 50) Thomas Nipperdey, *Die Deutschen wollen und dürfen eine Nation sein. Wider die Arroganz der Post-Nationalen*, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, Nr. 160, 13. Juli 1990, S. 10.
- 51) Thomas Nipperdey, *Deutsche Geschichte 1866-1918. Bd. II: Machtstaat vor der Demokratie*, 3., durchgesehene Aufl., München 1995, S. 909.
- 52) Thomas Nipperdey. *Bibliographie seiner Veröffentlichungen*, München 1993, S. 14.